

## 研究授業

2021. 12. 24

小学校と中学校を中心に「研究授業」というものが行われている。普段の授業との違いは何か。授業の設計図である学習指導案を作成する。それに参観者もいる。生徒からすると、自分たちの教室に、お客さんがくることになる。

研究授業はどんどんやったほうがよい。なぜなら、子どものためになる。授業者が設計図を描くということは、それだけ計画的・意図的な営みとなる。授業の質が上がることになる。子どもたちにとって、授業の質が上がったほうがよいのは疑う余地のないことである。

にもかかわらず、研究授業がどんどん行われることはない。なぜなのか。授業者にとって研究授業は、まだまだ特別なことなのであろう。人に見られるのが嫌だということもある。いろいろ言われることを良しとしないのもあるだろう。学習指導案を作成することが容易ではない点もあるかもしれない。

これらは、すべて授業者の立場からのものである。少し見方を変えてみる。教員にとってメインの仕事である授業を人に見られたくないとしたらどうであろう。仕事場を見せられないというのは特殊な仕事である。

さすがに一昔前と比べると、授業を見られることへの抵抗感は薄らいできたように思う。きっと、多くの授業者は、自分の授業がうまくいかない、思い通りにいかないことが嫌なのではあるまいか。誰でも、うまくいかないものは、できれば見せたくはないだろう。

それだけ、授業はむずかしいものである。うまくいく授業などまずない。必ず課題や反省点が出てくる。ベストの授業というものが存在しない。そうであるならば、人に見てもらってアドバイスをもらったほうがよい。それが研究授業である。もう少し、フランクにお互いに授業について言い合えるようにはならないものだろうか。これが、なかなかそうはならない。教員のプライドが邪魔をしているのかもしれない。

そんなわけで、特別な事情でもない限りは、一人の教員が年間に研究授業を行うのは、2回ほどである。学習指導案を用意せずに、人に見てもらう授業となると、授業参観をはじめ少なくはない。そもそも、校長がうろうろしながら授業を見ている。

私の場合だが、若い頃に、研究授業というわけではないのだが、教室の後ろにビデオカメラをセットし、自分の授業を撮影していたことがある。それを自分で見るのである。これは、きつい。人に言われるよりも苦しいかもしれない。自分の姿を客観的に見るわけである。自分のイメージとは全く違ったものが、目の前に映し出される。愕然とする。それでも、自分の授業の改善点を自分で指摘することができる。

今年度の研究授業のスタートは7月だった。その後、毎月のように12月まで行われた。先生方の労苦に敬意を表したい。先生方が費やしたエネルギーは、すべて子どもたちのためになっている。それが研究授業である。